
人生ってままならないものですよね？

織がみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生ってままならないものですよね？

【Nコード】

N8067Y

【作者名】

織がみ

【あらすじ】

異世界トリップ短期連載です。

全5話くらい。

ある日気づいたら知らない場所にいました。さて、どうなる？

1話（前書き）

何となく書きあげた行き当たりばったり小説です。
あと、かなり文才はないです。
その辺を了承しましたら、どうぞ。

1話

河田俊貴と言います。

文系学科の大学生です。

二十歳を過ぎて、もうそんな歳ではないと思うのですが異世界にトリップしたようです。

そう結論づけた理由はいろいろあります。

第一に朝寝て起きたら森の中というシチュエーションです。拉致や夢遊病といった可能性、後は友人のドッキリといった可能性もこの場合ありますかね。

でも、一応日本の首都にある大学に通っているので自宅も長閑な場所にはないんです。

電車で結構な時間をかけて通っているのも、そんなごみゴミした街中ではないと思いますが。寝ている人を家族や近所の人の目を掻い潜って運び出せるものなのでしょうか。

それに、どうも日本の森じゃない気がします。

どちらかといえば、フィンランドとかドイツとか。すみません、大分違いますね。

とにかく、一度も目覚めることなく外国の森に連行とかないですよね。

それとですね、第二に妖精？のようなものが見えます。

手の平サイズの子どもが結構たくさんいます。

歳は3歳くらいから結構上な感じの子も。

人間じゃないですよ。耳が尖っているような気がします。

えっーとですね、まだ続けますと第三に、空に青い月が見えます。

比喩とかでなく青い綺麗な月が浮いています。ちなみに満月まであと少しって感じです。そういえば、向こうで帰り道に見たのは三日月だった気がします。

すみません、まだありました。モンスター（仮）がいました。

逃げてます、走っています、登っています。

額にあるのと合わせて3つの紅い目、全長5メートル以上はあるだろう体軀は狼に似ている気がします。大きな口から覗く鋭い犬歯がとても素敵です。

やっぱり肉食ですよ、見るからに。

木の上から目下の避難対象であるモンスター（仮）を観察する。

実は物凄く焦って動揺している俊貴は考えても仕方ないことを思う。

幸い木登りは出来ないらしい、モンスター（仮）たち。木の上からじっと様子を伺う。

うわぁ、めっちゃ怖い。

グルルウ。

唸っても駄目ですから。絶対降りたりしません。

「気絶しそう」

夜が明け去っていくモンスター（仮）を見送って、どれほど経つだろうか。ようやく安全だとわかっておもわず呟く。

肩の力が抜ける。

安堵の息を吐く。

そんな俊貴の頬を小さな手が撫でた。

慰めるように小さな手を伸ばして、頬を撫でて来るのは小さな子どもたぶん妖精。

妖精、本当に何処にでも居る見たいです。

一晩大変お世話になった、この木登りし易かった木にも一杯います。

むしろ、時間が経つほど段々増えて行くミラクルさ。

怖がっている横で、膝の上に登って欠伸する君たちに惨敗です。

さて、朝になったのですが、大変なことを知ってしまいました。

異世界にきちゃったらしいとわかること第五です。ちなみにモンスター（仮）が第四ですね。

魔法陣っぽいものが下に光っています。

あれって、魔法ですかね。

1話（後書き）

河田さんは呑気かつ適当な人です。

あと、すごく焦っているのにどうしようもない事を考えてしまうという。本人は結構真面目に必至です。

2話（前書き）

短文でごめんなさい。

2話

眩い光を放つ魔法陣らしきもの。

思わず視界を手で覆ったその後には、とてつもなく美しい女性が其処には立っていました。

始めて異世界らしい所で出会った人間は、魔女だったようです。

魔法陣らしきものから突然出てきた女性、グリースさんはこの森を治める魔法使いだそうです。

魔法、やっぱりあれ魔法陣ですかね。

グリースさんは、自分が治める森に突如現れた不審な気配に様子を見に来たそうです。

不審な気配。

確かに不法侵入。言うなれば庭に現れた不審者、通報されますね。幸い、叫ばれたり攻撃されたりはしませんでした。

後から聞くと、魔法使いとして二つ名があるぐらいの実力者であるグリースさんはよっぽどの人が相手でない限り余裕で撃退できるとのこと。このときも、大した脅威ではないと判断したため様子を見ることにしたらしい。何より、初対面の僕は、迷子の子どものような顔をしていて警戒するまでもなかったと笑われました。

僕が、なんとも切ない気分になったのは言うまでもありません。

グリースさんは僕の話聞き、あり得ないと何度もいいながら家に連れて行ってくれました。

「此処は黒い森、守護されるべき聖地であり魔力の無い人間が入ってこられるような場所ではない」

そうですね、モンスター（仮）とか居ますもんね。

「ニホンという国名もトウキョウという名の王都も私の知る限り存在しない。チキュウなんて言葉も聞き覚えがない。」

思いつきり一刀両断されました。

「おまけにその服装。見たこともない素材と工程で出来ているらしい。信じたくもないがどうやらお前が此処とは違う世界から来たというのは本当らしい」

信じたくないって…………。

溜息まで吐かなくてもいいじゃないですか。

「…はい、僕が知る限り地球には魔法使いはいません」
グリースさんが難しい表情で頷く。

「精霊に好かれていたる所をみると無害なようだし、お前の身の振り方が決まるまで家で身元を預かろう」

意外なことに助けてくれるらしい。

いや、この人面倒とか言って放り出しそう……。すみません、失礼なことを思っていて。

思いがけず滞在先ゲットだ。

「有難うございます、宜しく願います」

その日から俊貴の黒い森での生活が始まった。

2話（後書き）

グレースさんは妖艶系美女です。河田さんは文学系男子というか草食系？です。

3話（前書き）

やや長めの話です。

あと今さらですが、『人生って…？』が？なのは、シリーズもので？と？があるからです。お蔵入りかもしれません。

3話

お久しぶりです。

良い年になって異世界に来てしまった河田俊貴です。

異世界で暮らし始めて1ヶ月程が経過しました。

黒い森なる神聖かつデンジャラスな場所で目を覚ました時はどうなるかと思いましたが、元気でやっています。

僕を保護してくれていた妖艶な感じの美女、グレースさんの生活はかなり順調です。

初対面の時は、あからさまに面倒そうなグレースさんに助けて貰えるのだろうかと不安を感じたのですが、実はとても面倒見の良い人でした。

保護して貰っているグレースさんの家―これがまた大きいのですが―では、基本的に何をやっても自由です。

僕は、魔法使いとして忙しいグレースさんの邪魔をするのもあれなので、もっぱらグレースさんの使い魔のリリーちゃんとジャスパ―さんにいろいろお世話になっています。

基本的な家事スキルとか一般常識ですね。

おもしろいですよ、この二人。

この世界の成り立ちや、主要な国の歴史、地理的位置、政治など、まるで学校の先生のように教えてくれるのがジャスパ―さんです。

教科書代わりの本や地図をグレースさんの書庫から出して、二人で勉強する時間はまさに授業といった感じですよ。

おまけに、とてもわかりやすいんです。

秀才型とも言えるのでしょいか、仕組みや過程を理解して教えてくれる彼は、とても良い先生です。

それとは打って変わって、リリーちゃんの教え方は何とも体感的です。

外に水くみや、薬草の採取、家畜の世話とかで連れ出してもらったのですが、教えるとかじゃないんですね。

はい、籠持って帽子かぶったねー？それじゃ、行こうか。何処にですか、といった感じですよ。

説明とか一切なしで、有無を言わず連行され、あとは実践あるのみです。

帰った後にいろいろわかるという不思議。

採りに行った木の実が食用なのか何なのかすら教えてくれません。ジャスパーさんから貰った図鑑で調べて、生で食べたら猛毒だったとわかったりする。

全く悪気はないのですよ。

こんな感じで、毎日が勉強という日々ですね。

最近では、炊事や掃除など日常に必要な道具の使い方はだいたい覚えて、困らなくなっています。

毎日食べる野菜や果物、穀物の名前も一致してきました。

始めは本当に何を食べるのも、恐る恐るだったのですが、そんなにぎよっとするような見かけの食品も強烈な味の食べ物もないですからね。

えっ？結構いろいろえぐいモノがある？ニチリアゴケの粉末を隠し味にしたサラダ？

……怖いことを聞いてしまいました。

異世界って怖い。

リリーさん、それ以上具体的な説明とかエピソードはいりません。

それと忘れていましたが、リリーちゃんは14歳ぐらいの少女と見た外見をしています。ジャスパーさんは白銀の狼ですね。

二人とも本来の姿ではなく、低燃費版らしいです。

いろいろと聞くのは失礼にあたるようで、あまり詳しくは知りませんが。

ただ、とても親切で二人と一緒に居るのは楽しいです。

さて、最後にグレースさんについてですかね。

僕を拾ってくれた魔法使いです。

外見的な特徴を言えば、ゆるく波打つ漆黒の髪と深紅の瞳をした美女です。年齢は20代半ばくらいですかね。

前にも言いましたが、妖艶な雰囲気のある綺麗な人です。

グレースさんは学院と言う魔法使いを取りまとめる組織でも、結構な力を持つ魔法使いだそうです。

今は、クレシェランテ国トウィースの黒い森を守護する仕事に就いていて、そのため僕に出会ったわけです。

魔法使いと呼ばれる人たちは、一般の人たちが持ち得ない力を有する代わりに世界の調和を守る義務があると言われています。

それゆえ魔法を使う才のある人は、学院に通うか魔法使いに師事しなければいけません。そして、魔法使いとして認められれば一握りの例外を覗き、学院に所属する。

こちらに来たばかりの時には、魔法と言うファンタジーなものにただ驚き、興奮していたのですが、いろいろ制約や決まりがあるようです。

ちなみに残念ながら僕に魔法使いの才能はあまりないみたいです。全くないというわけではないみたいです。常人をやや上まわるぐらいだそうです。特に学院に通う必要もないとか。

物語みたいには上手いきませんよね、やっぱり。

けれど、その代わりとっていいのでしょうか。精霊とか妖精には、好かれる体質みたいです。

こちらに来たばかりの時見た、小さい子たちとか、半分透けている女の人とか。

本当に何処にでもいるのですが、存在を感じられる人って滅多にいないみたいです。

見て、触れて、話せるとなると本当に珍しいそうです。

この家に居るとよくわからないのですが。だって、グレースさんを始めとして皆見られるので有り難身とかないですよ。

怒られますね、こんなこと言っていたら。

けれど、本当に珍しいぐらいで特に何か出来るとかありません。

強いて言えば、妖精は可愛いとかですかね。

何もない所から現れたり、物質を出したりする魔法使いの方が余程すごいです。

でも、いろいろ大変そうです。

グレースさんを見ている限りでも、びっしり使いこまれた本が並べられた書齋に、研究室。深夜まで籠って作業をしているらしいのを見てみると、羨ましいより大変そうというのが正直な感想です。

グレースさん自身はとも日々が充実しているとのことだけど、限つくりながら言うことではないですよ、グレースさん。

こんな感じで割と順調に過ごしています。

近いうちに、グレースさんの知人で召喚魔術に詳しい魔法使いを訪ねる予定です。

そうしたら、僕がこちらに来了原因も分かるかもしれません。

3話（後書き）

自由人なりリーとしつかりものジャスパー。

主人公は自由人に見えてそれなりに空気は読んでいます。一人の時と脳内のみフリーダムなんですね。

4話（前書き）

またまた、短いです。
そして、少し暗いです。

4話

もしかしたら、二度と家には戻れないかもしれません。

グレースさんの知人である魔術師、シュタイナーさんと会って暫く経ちました。

彼は僕の状況をあらかじめ聞いて知っていたのでしよう。

長い時間をかけて、僕に彼が推測し得る限りの現在の状況と、僕が還れる可能性を教えてくださいました。

率直に言ってあまり見通しはよくありません。

今現在、召喚や転移の専門魔法使いですら異なる世界への移動と
いうのは不可能なのだそうです。

そのため、僕がこの世界に落ちた原因自体が不明であり、同じこ
とがまた起こる可能性は高くないというわけです。

この世界には人間以外にも知恵ある種族が多く存在します。

エルフやドワーフ、龍や一角獣といった幻獣、多種多様な種族が
存在します。

そんな彼らですら、異界に渡る術は知らないだろうとシュタイナ
ーさんはハッキリと断言しました。

また僕がこちらに來た時に現れた場所も問題なのだそうです。

何者かが僕を呼び寄せたなら、近くに誰かがいたはずです。

しかしながら、僕がこちらに來た時に周囲に人はいませんでした。
また、黒い森に誰かが侵入すればグレースさんが気付かないはず
がないのです。

つまり、僕がこちらに來たのはほぼ100%の確率で偶発的なも
のなのです。

シュタイナーさんに会うまでの一月、もしかしたらとその可能性

は考えていました。

それでも、グレースさんが最もこの分野では信頼出来ると言った魔法使いに「還れない」可能性が高いと言われれば、僕は動揺せざるをえませんでした。

元の世界で特に何がしたかったかと問われても直ぐに即答はできません。

それでも、大学の講義やバイト先での時間、家族や友人とのたあいのない会話は、僕にとって日常で切り離せないものだったのです。それを失うというのがどういふことなのか想像できません。

もう二月ほどこの世界に居ますが、どうやっても二度と彼らと会えない、存在を感じられないというのが理解できません。

それなのに、時に叫びたいほどの激情が僕を襲い、気が付けば眠られない日々が続いています。

夢で見る彼らは笑っているのに、僕はその名をどうしてか呼ぶ事ができぬまま目覚めるのです。

浅い眠りを繰り返して、長い夜をただ寝台の上でうずくまって過ごします。

もう僕は、還られないのでしょうか。

4話（後書き）

能天気そうな主人公ですが、さすがに凹んでいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8067y/>

人生ってままならないものですね？

2011年11月27日07時02分発行